

『ケルズの書』は「ケルト」美術の傑作か？

——「ケルト」再考論の入門として——

Is the Book of Kells a masterpiece of ‘Celtic’ arts?

田中 美穂

Miho TANAKA

一般科文系

Dept. of General Education (Humanities)

The Secret of Kells (Brendan to Kells no himitsu), set in medieval Irish monastery of Kells, was released in all parts of Japan in 2017. The Book of Kells is relatively famous and popular among Japanese people who are interested in Irish culture, Irish literature and Irish history. Most of them recognize this illuminated manuscript as a masterpiece of *Celtic* arts. I doubt the reliability of the concept of *Celts* or *Celtic* in pre-modern Irish history. I do not consider that it is suitable to use the term *Celts* or *Celtic* in medieval Irish history and culture.

This paper introduces recent studies of the Iron Age British archaeology, DNA researches of British people and the Book of Kells and prompts to reconsider about *Celts*.

キーワード：『ケルズの書』、『ブレンダンとケルズの秘密』、アイオナ、
聖コルンバ、「ケルト」再考、島嶼の美術

はじめに

アイルランドのトム・ムーア監督 (Tomm Moore, 1977-) は、日本で、2016年に公開された『ソング・オブ・ザ・シー 海のうた』(*Song of the Sea*)¹⁾と2017年に公開された『ブレンダンとケルズの秘密』(*The Secret of Kells*)²⁾の両方でアカデミー賞長編アニメーション映画賞にノミネートされた。実際には、後者が2009年製作の監督初の長編アニメーション作品、前者が2014年製作の2作目の作品となっている。『ソング・オブ・ザ・シー』はアイルランドのセルキー (アザラシ) にまつわる民間伝承を題材としている。一方、『ブレンダンとケルズの秘密』は、舞台がケルズ修道院であり、時代設定は9世紀前半頃である。アイルランドが世界に誇る至宝『ケルズの書』の制作秘話がテーマであり、中世アイルランドの修道院とヴァイキング襲撃の歴史が物語の中で語られる。

筆者は、大学院生時代に中世初期のアイオナ修道院の歴史を研究していたが、アイルランドの中世、しかも、修道院が舞台で、『ケルズの書』の彩色頁が鮮やかにスクリーンに映し出されるような映画が製作され、日本全国で公開

されるとは思いもしなかった。中世アイルランドの歴史と文化を扱った作品『ブレンダンとケルズの秘密』は、類まれな質の高さと美しさを誇る名作である。

その一方で、『ケルズの書』が、「ケルト」写本や「ケルト」美術に分類されたり、描かれた文様が「ケルト」文様と言われたりすることに筆者は違和感を覚えずにはいられない。学問の世界では、「ケルト」そのものに対して、また「ケルト」を冠した分類や用法に対して、修正や見直しが進んでいるからである。

本稿では、映画で描かれた中世アイルランドの修道院に関する歴史的背景を明らかにし、形容詞のように中世アイルランドのさまざまなものに使用される「ケルト」をめぐる最新の研究、および「ケルト」再考について論じていく。加えて、筆者自身のこれらの問題に対する考えも述べていきたい³⁾。

1. 『ブレンダンとケルズの秘密』と『ケルズの書』

アニメーション作品『スノーマン』(1982年) (監修) や『風が吹くとき』(1986年) (監督) を手掛けたことで知ら

れるジミー・ムラカミ (Teruaki “Jimmy” Murakami, 村上輝明, 1933–2014) は、「アイルランド・アニメ界の父」と呼ばれている。日系アメリカ人であり、太平洋戦争時にトゥーリーレイク強制収容所に家族とともに収容された経験を持つ。ムラカミは、日系人を収容所送りにした合衆国政府のことを生涯許せなかったようである。アニメーターとして活躍するようになり、アイルランドに移住した。アイルランドのアニメーション製作を指導し、この国がヨーロッパ屈指のアニメ大国として発展することに貢献した。『風が吹くとき』で核兵器や核戦争の恐怖を描いた彼は、晩年、広島原爆投下を題材にした日本とアイルランド合作の作品製作に取り掛かっていた。主人公はアイルランド系アメリカ人の兵士と日本人の看護師見習いの女子学生で、キャラクター・デザインを『夕風の街 桜の国』『この世界の片隅に』の作者こうの史代氏に依頼していた⁴⁾。

アイルランドのディングル国際映画祭では、アニメ部門の功労者に与えられる「ムラカミ賞」(The Murakami Award) が2013年に設置され、本人が第1回目の受賞者となった。2015年の「ムラカミ賞」の受賞者は、トム・ムーア監督であった。受賞の際、ムーア監督は、若い頃、ジミー・ムラカミにインスピレーションを受けたと言い、彼の業績を称えている⁵⁾。また、トム・ムーア監督は、『ソング・オブ・ザ・シー』の日本公開に合わせて来日した際、葛飾北斎、黒澤明監督の『七人の侍』、ジブリ作品では宮崎駿監督の『となりのトトロ』『もののけ姫』や高畑勲監督の『かぐや姫の物語』、山村浩二監督の短編映画に影響を受けたことをインタビューで語っている。ジブリ作品はとて日本的で、世界中の観客が日本文化を発見する楽しみができる、自分もアイルランド文化で同様のことがしたい、とムーア監督は述べている⁶⁾。ムーア監督の『ソング・オブ・ザ・シー』も『ブレンダンとケルズの秘密』も、まさにアイルランドの文化や歴史を世界に発信することに大きく貢献していることは間違いない。今やアニメーションは日本が世界に誇る文化の一つであるが、ジブリ作品は言うまでもなく、日系アメリカ人のジミー・ムラカミの存在が、アイルランドのアニメ業界に大きな足跡を残していることを知って、筆者も非常に興味深かった。

さて、トム・ムーア監督の『ブレンダンとケルズの秘密』であるが、聖と俗、修道院と森、人間と動物や妖精、キリスト教化後の芸術作品とキリスト教以前のアイルランドの美術作品とが対照的に描かれる一方で、作品を通してそれらが見事に溶け合っている、そういう映画であった。

9世紀前半頃のケルズ修道院が舞台であるが、現在のケルズ修道院は街中にあるので、当時の修道院やその近くの森のモデルとして、ウィックロー州のグレンダロッホとその周辺が参考にされている。世界遺産に登録されているミーズ州のニューグレンジや、『ケルズの書』があるダブリンのトリニティー・カレッジのオールド・ライブラリーにスタッフは足を運んだという⁷⁾。

キリスト教の到来前のもの、異教的なものとして映画に登場するのは、クロム・クルアハ (Crom Cruach) と呼ばれる恐ろしい大蛇のような神、トゥーローの石 (ゴルウェイ州、紀元前3~2世紀頃)、北アイルランドのボア島にある背中合わせの石の彫刻 (人の顔をしており、腕をX字型に組んでいる) (ファーマナ州) などがある。ボア島の彫刻は、よく間違われて鉄器時代の異教の彫刻と記されるそうであるが、実は9世紀か10世紀の彫刻と推定されている⁸⁾。一般の人が異教や「ケルト」的なものとしてとらえる有名な彫刻が、映画で視覚的な効果をもたらしている。

しかし、筆者が注目するのは、映画に登場する修道士たちや修道院での写本制作の方である。主人公の少年の名はブレンダンであるが、ブレンダンといえば、ゴルウェイ州のクロンファート修道院を創設した聖ブレンダンが思い浮かぶ。6世紀の聖人で、『聖ブレンダンの航海』でよく知られている。ブレンダンに写本装飾の技術を教えるエイダンは、ヴァイキング襲撃を逃れてアイオナ修道院から写本 (のちの『ケルズの書』) を携えてケルズにやって来たという設定になっているが、エイダンといえば、635年にアイオナ修道院からイングランド北部のノーサンブリアに赴き、リンディスファーン修道院を創設し、リンディスファーンの修道院長と司教を務めた聖エイダン (651年没) を思い出す。実在の有名な聖人の名が、映画の登場人物の名として上手に使用されているようである。

エイダンが連れて来た白猫のパンガ・ボン (Pangur Bán) は実在の猫である。映画やパンフレットで古アイルランド語の「パンガ・ボンの詩」が一部紹介されているが、9世紀の修道士が書いた詩 (作者不詳) の中にパンガ・ボンが登場する⁹⁾。ちなみに絵本『ケルズの秘密』では、ブレンダンは実在の人物ではないが、『ケルズの書』は実在する本であり、パンガ・ボンも実在の猫であると最後の頁に書かれている¹⁰⁾。

映画でも描写された『ケルズの書』の中でもっとも有名なキー・ロー (Chi-Rho) 頁 (ギリシア語で「キリスト」を表す単語の最初の2文字のXとPと、おびただしい装飾によって埋め尽くされた頁) の左下 (Pの字の下) には、猫とネズミが描かれている。二匹のネズミが向かい合って一つの聖体を口にくわえて取り合っており、それぞれの後ろの2匹の猫がそれぞれのネズミの尾を踏んづけている¹¹⁾。

映画にも登場する聖コルンバ (アイルランド語の名前は「教会の鳩」を意味する「コルム・キレ」) は、アイルランド北西部の王族の出身であったが、563年にスコットランド西部の小さな島アイオナにアイオナ修道院を創設した。597年に死去したが、その100年後に9代目アイオナ修道院長アダムナーンによって『聖コルンバ伝』が執筆された。さらにその100年後の8世紀末頃から『ケルズの書』の制作がアイオナで始まったものと推定されている。『アルスター年代記』の1007年の記述には、ケルズの修道院からコルム・キレの偉大な福音書が盗まれたが、2か月と20夜

の後に金が剥がされた状態で見つかった、とある¹²⁾。この「コルム・キレの偉大な福音書」とは『ケルズの書』のことであると考えられている。このように『ケルズの書』は、初代アイオナ修道院長の聖コロンバと深く結びついているのである¹³⁾。

ブレンダンのおじでもあるケルズ修道院長の名はケラッハであるが、同時代のアイオナ修道院長にはケラッハという名の人物が2人いる。815年に死去したケラッハと、865年にピクト人の地で死去したダロウとアイオナの修道院長のケラッハである¹⁴⁾。ブリテン島北部の島や沿岸は、793年のリンディスファーンをはじめ、8世紀末からヴァイキングの襲撃を受けるようになった。アイオナ修道院は802年に異教徒によって燃やされ、806年にはアイオナ修道院共同体の68人もが異教徒によって殺害された。翌年には、アイルランド中部のケルズでコルム・キレの新しい(修道院の)町の建設が始まった。ケルズの土地は、すでに804年にコロンバの継承者、すなわちアイオナ修道院長に与えられていた。815年に死去したケラッハは、前年にケルズの修道院が完成した時にアイオナ修道院長の職を辞したとある¹⁵⁾。映画のケルズ修道院長のモデルになったかどうかは分からないが、同名のアイオナ修道院長が同時代にいたことは確かである。

やがてケルズは、コロンバの遺産を受け継ぐ修道院として発展していく。また、歴代アイオナ修道院長のほとんどをコロンバと同じ一族の出身者が占めていた。おじから甥へと修道院長が継承されていく例も珍しくはなかった。

2. 「ケルト」再考論の現在

前述のように、筆者は、『ケルズの書』が「ケルト」写本だとか、「ケルト」美術だとか、「ケルト」を冠して語られることに違和感がある。これまでもそういった問題について議論してきたが¹⁶⁾、ここでは、改めて「ケルト」再考論に関する現在の研究動向を紹介したい。

3年前の拙論「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」でも取り上げた分子遺伝学の分野であるが、その後も興味深い結果が発表されている。「人間集団や歴史言語学研究への分子遺伝学の応用は…これから発展する分野であることは間違いない」とある¹⁷⁾。世界的に有名な科学誌に「ケルト」に関連する分子遺伝学や語彙統計学の研究が次々と掲載されている。そういった研究では、いわゆるインド・ヨーロッパ語族の起源や「ケルト語派」を含む各言語系統への分裂時期について検討されていたり、ブリテン諸島への「ケルト人」の移住について分析されていたりする。筆者はいずれの分野も専門外で、これらの研究の分析結果を追うことくらいしかできないが、現段階で、少なくともこれらは、「ケルト」再考論を組み立てていくうえで参考に値する研究であると考えている。

2003年に『ネイチャー』誌に掲載されたインド・ヨー

ロッパ語族の起源と言語系統の分離に関する研究では、インド・ヨーロッパ語族から、6100年前にケルト語派とその他の西ヨーロッパの語派(イタリック語派、ゲルマン語派)が分離し、2900年前にアイルランド(ゲール/ゴイデル)諸語とウェールズ(ブリトン/ブリソン)諸語に分離したとある。ちなみにゲルマン語派の中のドイツ語群と英語が分離したのは約1578年前という結果になっている¹⁸⁾。他の研究でも、インド・ヨーロッパ語族の五大語派のケルト語派、ゲルマン語派、イタリック語派、バルト・スラヴ語派、インド・イラン語派はすべて4000~6000年前に異なる言語系統として出現したとされる¹⁹⁾。

つまり、インド・ヨーロッパ語族からのケルト語派の分離は紀元前4000~前2000年頃に、ケルト語派からのゲール諸語(アイルランド語、マン島語、スコットランド・ゲール語)とブリトン諸語(ウェールズ語、ブルトン/ブレイス/ブルターニュ語、コーンウォール語)の分離は紀元前900年頃にあったということになる。ケルト語派からゲール諸語とブリトン諸語が分離するのに、3000年以上要した可能性が指摘されている。

コリン・レンフルーは、上記の言語系統に関する研究も踏まえ、(従来「ケルト人」とされてきた鉄器時代の)紀元前6世紀のハルシュタット期の首長や紀元前3世紀のラ・テーヌ期の職人がケルト語を話していたのか、それともゲルマン語派に分類される言語を話していたのか、と疑問を提示する²⁰⁾。ジョン・コリスも次のように指摘する。「ケルト人」の遺伝子を持つ子孫は、ガリシア語、カステイリャ語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ハンガリー語などを話す。しかし、ブルトン(ブレイス/ブルターニュ)語を除き、彼らは誰もケルト語を話してはいない²¹⁾。

今やブリテン諸島の考古学界では、鉄器時代における大陸からブリテン諸島への「ケルト人」移住説、およびブリテン諸島の「ケルト化」はほぼ完全に否定されている。考古学が専門のレンフルーもコリスもそのことを熟知しており、鉄器時代に大陸にいたという「ケルト人」が本当にケルト語を話していたのか疑われ、(今も昔も)「ケルト人=ケルト語の話者」とは定義できないことを指摘する。

加えて、上記の言語系統に関する研究によると、ケルト諸語の根拠・語源となった「(鉄器時代の大陸の)ケルト人」よりも、(ブリテン諸島の)ケルト諸語(を話す人々)の方が、はるか昔から存在していたということになる。

そうなれば、従来の「ケルト」論——ケルト語を話す「ケルト人」が鉄器時代に大陸からブリテン諸島に移住し、ブリテン諸島を「ケルト化」した。以後、現在に至るまで、ブリテン諸島のアイルランド、スコットランド、ウェールズ、コーンウォールには「ケルト人」が住んでおり、「ケルト」の遺産や伝統を保存している——は自ずと崩壊する。

しかも、前近代のブリテン諸島においては、「ケルト」という言葉も概念も不在という史実がある。歴史上、アイルランド語やウェールズ語が確認できるのは中世初期以

降であるが、たとえばベーダは、731年頃の著作『イングランド人の教会史』の冒頭で、アイルランド語とウェールズ語が別々の言語であることを証言している。当時のアイルランド語の話者にとって、ウェールズ語の話者も英語の話者も同じ異国語の話者であり、アイルランドの人々がウェールズの人々に対して、「ケルト人」として同胞意識を持つなどということは一切ない。「ケルト」という言葉も概念もまったく存在しない。

拙論「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」で取り上げたように、分子遺伝学の分野からも、大陸からブリテン諸島への「ケルト人」移住説が否定されてきたが、ごく最近では、連合王国の非サクソン語地域には一般的な「ケルト人」の証拠がないという結果が提示されている。遺伝学的に、コーンウォール人の祖先は、(同じブリトン諸語を話す)ウェールズ人の祖先とは全く異なっており、デヴォンやイングランド中部・南部の祖先の方がはるかに彼らに近いという。つまり、このDNA研究によって、連合王国には遺伝学的に唯一無二の「ケルト人」なるものが存在しないことが明らかになったのである。共同研究者の一人マーク・ロビンソンは、「コーンウォールからウェールズ、スコットランドにかけての「ケルト」周辺地域は同一だと想定していたが、全く違っていた」「コーンウォール、ウェールズ、北アイルランド、スコットランドの「ケルト人」グループが、こんなに異なる遺伝子の型を持っていたことに非常に驚いた」という²²⁾。

以上、言語学や遺伝学の研究でも、現段階で、従来の「ケルト」論を再考せざるを得ない研究結果が提出されていることは確かである。

3. 「ケルト」美術という概念は有効か？

再び『ケルズの書』の話題に戻りたい。現在の『ケルズの書』研究の第一人者といえば、『ケルズの書』を保管するトリニティー・カレッジ・ダブリンの図書館で写本管理責任者の任にあるバーナード・ミーハンであろう。2012年にミーハンによって『ケルズの書』研究の決定版ともいべき大型本が出版された(2015年に日本語版が出版)。そのミーハンの研究書では、「ケルト」という言葉が一切使われていない。ちなみに、映画『ブレンダンとケルズの秘密』にも「ケルト」という言葉は出て来ない。ただし、トム・ムーア監督らは、インタビューなどで「ケルト」という言葉を口にしてるので、従来の「ケルト」観にそってアイルランドの芸術や文化をとらえているものと思われる。筆者がいちいち引っ掛かってしまう「ケルト」という言葉が出て来ないので、ミーハンの研究書はストレスを感じずに読めた。国内では、盛節子氏によるアイルランドの中世キリスト教美術解説が秀逸であると言えよう²³⁾。

ミーハンは、『ケルズの書』に影響を与えたものとして、古代ローマ時代末期の美術に見られる動物像、アイルラン

ドのハイ・クロス(高十字架)やスコットランドのピクト美術の石の彫刻を挙げ、研究者たちが『ケルズの書』の装飾に、アングロ・サクソン美術、ピクト美術、ビザンティン美術、アルメニア美術、カロリング朝期美術との類似点を見出すまでになっていると言う。また、巻末で具体例を出して、フランス、イングランド、イタリア、シチリアの写本や工芸品との類似点、さらには8世紀のタラ・ブローチとの類似点を示している²⁴⁾。

「ケルト」美術という言い方をしないミーハンは、中世初期のブリテン諸島の美術を「島嶼の(Insular)美術」と呼ぶ。ミーハンによれば、美術や写本の様式の特徴を記すために広範囲の中立的な用語として、「島嶼の」という言葉が用いられるのである²⁵⁾。いずれにせよ、『ケルズの書』をはじめとする島嶼の写本研究の第一人者であるミーハンは、もはや「ケルト」という言葉は使っていないのである。また、『ケルズの書』の制作についてミーハンは、多くの研究者が制作時期を800年頃と見ている点で一致していると指摘し、制作地として「アイオナ説」と「ケルズ説」のどちらも成り立つし、一部がアイオナで、一部がケルズで制作された可能性もあるという²⁶⁾。

国内外を問わず、「ケルト」美術といえば、一般に、大陸のハルシュタット期とラ・テーヌ期の美術と、ブリテン諸島の鉄器時代から中世初期までの時期の、ローマやアングロ・サクソンなどの美術を除いたものがその範疇に入れられる。『ケルズの書』でも数多く見られる動物文様、組紐文様、渦巻文様などは、「ケルト」文様と称される。

考古学者の新納泉氏は、『鉄器時代のブリテン』と『鉄器時代と中世前期のアイルランド』で、最新のブリテン諸島の考古学界の研究動向を詳細に論じるとともに、日本列島との比較についても言及している。新納氏は、「ケルト芸術」を代表するものと位置づけられている)ブリテンの鉄器時代の工芸品の基本的な特徴は、「地中海地方や大陸の製品の、模倣の連続であったということができよう」と分析する。また、「いわゆる「ケルト文様」は、ギリシャのパルメットが変形したものであり、ギリシャのパルメットは、紀元前7世紀以降に進んだ、東洋化の産物である」と指摘する²⁷⁾。

上記のミーハンの研究書でもいわれていることであるが、前近代のブリテン諸島の芸術は、ブリテン諸島内や近隣のヨーロッパ大陸から地中海世界や東方まで、さまざまな地域の影響を受けて開花したものであり、大陸にいたという実体が定かでない「ケルト人」の名を付けて「ケルト」美術として括られる必要性や正当性を筆者は感じない。

新納氏はすでに1999年に次のように述べている。「今日では、ブリテンの鉄器時代を担った人々は、青銅器時代以来の伝統的なブリテンの住人であったことが、ほぼ共通の認識となってきている。もちろん渡来人は存在したであろうが、侵略や征服、支配というような形による文化の断絶は、まったく認められないといってもよい」²⁸⁾。

多くの研究者がすでに指摘しているように²⁹⁾、「ケルト」美術というときの「ケルト」が何を指すのかが不明確で、「ケルト」美術と、イングランドの美術やヴァイキングの美術との違いもあいまいである。すなわち、「ケルト」美術の特徴とされる動物文様や渦巻文様などは、イングランドの美術やヴァイキングの美術でも見られるものであるし、東方にもつながるデザインや流行の類のものであると考えられる。何より、大陸からの「ケルト人」移住説が否定された今、前近代のアイランドの美術作品を「ケルト」美術と呼ぶことが有効であるとは言えないのである。

おわりに

「ケルト」概念の有効性を主張されるのは、文学や神話の研究者や愛好家に多いと思われる。そういう方々にお勧めなのが、J・P・マロリーが2016年に出版したばかりの著作である。古代「ケルト」の伝統が保存されているからこそ、アイランド文学を「ケルト」文学と呼べるのであろう。「ケルト」神話も同じであろう。しかし、マロリーは、「(そのように主張するのは)この保存のプロセスがどのように成し遂げられてきたのかを説明するよりも簡単だ」と皮肉を込めて言う。また、鉄器時代の「ケルト人」移住説が否定され、「ケルト語を話すアイランド人がいつアイランドに到着したのか」が分からない今、「アイランドの物語にガリア人の遺産が保存されているとは考えられない」と言う³⁰⁾。彼は、著書の中で、アイランドの物語が、古代のガリアや「ケルト」の伝統を保持しているとする従来の説を改めて批判・否定している。

筆者の「ケルト」に対する疑問もこの視点から始まる。筆者も学部生の頃は、アイランドは「ケルト」の国だと信じていた。国内で量産されるようになった「ケルト」に関する本も片っ端から読んでいた。卒論では、史料の英訳を使っても許されるが、院生になると、修論や博論を執筆するために、原語のラテン語や古アイランド語で史料を読まなくてはならない。本場の最新の研究を網羅しなければならない。アイランドの大学にも留学しなければならない。その過程で、「ケルト」に対する疑問が大きくなっていった。まず、くり返しになるが、中世初期のアイランドの史料には「ケルト」という言葉も概念も皆無であること、次に、中世アイランドに関する実証的な研究をしている研究者はほとんど「ケルト」という言葉を使用しないことに気づいた。そして、国内外の「ケルト」に関する本が、大陸の鉄器時代に始まり、中世初期までのブリテン諸島の歴史や文化が続き、さらに近代以降のケルト語派に分類される地域の歴史や文化を、いともたやすく時間と空間を越えて一括して扱っていることに違和感を覚えるようになった。しかも、これらの本で語られる「ケルト」の定義はあいまいで、なぜ「ケルト」だけが時間と空間を越えて伝統を受け継ぐことができたのかについては明らかに

されない。もっとも、「存在しない伝統」を明らかにするのは不可能なことであるとも言えるかもしれないが。

近年では、ブリテン諸島の前近代の歴史が記述される際、従来の「ケルト人」移住説や「ケルト」観の見直しについて言及されることも増えてきた。しかし、相変わらずアイランドの前近代史に対して、「ケルト」という言葉が使われている。アイランドの「(島の)ケルト」は、近代に創造されたものであるもので、使うなら近現代史の方であると筆者は考えるが、近現代史の専門家は、近現代の歴史叙述では使わない「ケルト」「ケルト系」「ケルト化」といった言葉を、前近代の歴史叙述ではよく使われる。なぜか「ケルト」とアイランドを結びつけたいようである。「アイランド人」と言えばよいのに、なぜ「ケルト系アイランド人」と言うのか、アイランドのキリスト教や教会に対して、なぜ「ケルト系キリスト教」「ケルト系教会」と言うのか。アイランドに対して「ケルト」という言葉を使うことによって何を暗示しようとしているのか。

たとえば、中世のイングランド人に対して「ゲルマン系イングランド人」と言うのだろうか、彼らがゲルマン語派の英語を持ち込んだからといってブリテン島が「ゲルマン化した」と言うのだろうか。先史時代から現代までの北欧、イングランド、オランダ、ドイツの人々を等しく「ゲルマン人」と呼んだり、彼らの文化をすべて「ゲルマン文化」と言ったりするのだろうか。ナチスの件があるにせよ、「ゲルマン」が濫用されることは少ない。一方、何かと言語に依拠される「ケルト」であるが、現代のアイランド人のほとんどが日常的に話しているのは、英語である。「ケルト諸語」ではない。また、アイランド語が依拠すべきは、起源も実態もよく分かっていない「ケルト諸語」ではなく、類似性の高い「ゲール/ゴイデル諸語」の方であろう。

『ケルズの書』に対して、もはや学問の世界では「ケルト」美術とは言われなくなってきている。『ケルズの書』は、「中世アイランド」美術、「島嶼の」美術の傑作である。また、アイオナやケルズで造られた十字架は、「ケルト」十字架ではなく、「ハイ・クロス」と呼ばれている。中世アイランドでは、「ケルト」の冠は不要なのである。

参考文献

- 1) トム・ムーア監督『ソング・オブ・ザ・シー 海のうた』(*Song of the sea*) (2014) [Blue-ray: TCエンタテインメント, 2017].
- 2) *The Secret of Kells* (2009), directed by Tomm Moore & Nora Twomey [DVD: Cartoon Saloon, 2009].
- 3) 筆者は、『ケルト文化事典』(木村正俊・松村賢一編, 東京出版堂, 2017年)で、アイランドの聖人や修道院に関する項目、すなわち、聖コルンバ、聖アダムナーン(同事典の表記では「アダウナーン」とされた)、アイオナ修道院、聖ブレンダンなどの執筆を担当した。同事典は、従来の「ケルト」観・「ケルト」論にのっ

- とって構成されているが、個々の項目の説明は各分野の専門家によるものが多い。個人的には、学究的にこれだけ「ケルト」に対する見直しが進んでいるにもかかわらず、その言及がほとんどないのが残念である。2017年12月開催の日本アイルランド協会の年次大会では、この事典の出版を機に、「ケルト」に関するテーマ発表が行なわれることになった。筆者は、その発表者の一人として加わることになり、そのことが、3年前の拙論「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」(『大分工業高等専門学校紀要』第51号, 2014年, 1-6頁)に続いて本稿の執筆を意図した理由の一つである。
- 4) 『WOWOW ノンフィクションW 巨匠映画監督 79年目の原点〜ジミー・ムラカミ 人生を込めたメッセージ〜』(WOWOW, 初回放送: 2012年11月).
 - 5) Award: Tomm Moore to receive The Murakami Award at Animation Dingle (March 12th, 2015), [<https://scannain.com/irish/the-murakami-award-tomm-moore/>] (最終検索日: 2017年9月26日).
 - 6) 映画『ソング・オブ・ザ・シー 海のうた』パンフレット(ミラクルヴォイス, 2016年)より「トム・ムーア監督 インタビュー」. 上記のBlue-ray 特典にもこのインタビューが収録されている.
 - 7) The Secret of Kells 神話とアニメの愛蘭土紀行 『ブレンダンとケルズの秘密』をめぐる旅 [<https://wired.jp/special/2017/the-secret-of-kells/>] (最終検索日: 2017年9月26日); 映画『ブレンダンとケルズの秘密』パンフレット(チャイルド・フィルム/ミラクルヴォイス, 2017年).
 - 8) Ryan, Michael (ed.), *Irish Archaeology Illustrated* (Dublin: Country House, 1994), pp. 109, 118, 213.
 - 9) Murphy, Gerard, *Early Irish Lyrics* (Oxford: Clarendon Press, 1956), pp. 2-3, 172.
 - 10) Tomm Moore, retold by Mary Webb, based on the film, *The Secret of Kells* (Dublin: The O'Brien Press Ltd, 2009), p.61.
 - 11) バーナード・ミーハン/鶴岡真弓訳『ケルズの書——ダブリン大学トリニティー・カレッジ図書館写本』(岩波書店, 2015年), 122頁; 萩原美佐枝『アイルランドの至宝 ケルズの書 復元模写及び色彩と画像の考察』(求龍堂, 2016年), 48-49頁.
 - 12) Mac Airt, S. and Mac Niocaill, G. (eds and trans.), *The Annals of Ulster(to AD 1131) (AU)* (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1983), 1007. 11.
 - 13) 以上, アイルランドの聖人や修道院に関しては, 田中美穂著「聖コロンバ」「アイオナ修道院」などの項目(『ケルト文化事典』, 142-156頁)を参照のこと.
 - 14) AU, 815. 6; 865. 2.
 - 15) AU, 802. 9; 804. 12; 806. 8; 807. 4; 814. 9; 815. 6.
 - 16) 田中美穂「「島のケルト」再考」『史学雑誌』第111編第10号, 2002年, 56-78頁; 同「「島のケルト」再考——ブリテン諸島史の可能性を探って——」『ケルティック・フォーラム』第7号, 54-57頁; 同「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」; 同「中世アイルランド史研究の今」『歴史と地理691(世界史の研究246)』, 2016年, 57-60頁.
 - 17) コリン・レンフルー, ポール・バーン著/池田裕他訳『考古学: 理論・方法・実践』(東洋書林, 2007年), 462頁. 2004年に出版された書籍の翻訳である.
 - 18) Gray, R. D. and Atkinson, Q. D., Language-Tree Divergence Times Support the Anatolian Theory of Indo-European Origin, *Nature*, 426 (27 Nov. 2003), pp. 435-439, esp. p. 437.
 - 19) Bouckaert, R. et al., Mapping the Origins and Expansion of the Indo-European Language Family, *Science*, 337 (6097)(24 Aug. 2012), pp. 957-960.
 - 20) Renfrew, C., Early Celtic in the West: The Indo-European Context, in Koch, J. H. and Cunliffe, B., *Celtic from the West 2* (Oxford: Oxbow Books, 2013), p. 216; 原聖『ケルトの水脈』(講談社学術文庫, 2016年), 354-356頁.
 - 21) Collis, John, *The Celts: Origins, Myths, Inventions* (Stroud: Tempus, 2003; rep., The History Press, 2011), p. 230.
 - 22) Leslie, S. et al., The fine-scale genetic structure of the British population, *Nature*, 519 (19 Mar. 2015), pp. 309-314, esp. p. 314; DNA study shows Celts are not a unique genetic group (18 Mar. 2015), [<http://www.bbc.com/news/science-environment-31905764>] (最終確認日: 2017年9月27日).
 - 23) P・ミルワード/盛節子他『新版 ヨーロッパ・キリスト教美術案内1』(日本基督教団出版局, 1999年), 67-84頁(盛節子著「アイルランド」).
 - 24) ミーハン『ケルズの書』, 104, 109, 238-241頁.
 - 25) Meehan, Manuscript Illumination, in Duffy, S.(ed.), *Medieval Ireland: An Encyclopedia* (N. Y. & London: Routledge, 2005), p. 316.
 - 26) ミーハン『ケルズの書』, 21頁.
 - 27) 新納泉『鉄器時代のブリテン』(岡山大学文学部研究叢書17, 1999年); 『鉄器時代と中世前期のアイルランド』(岡山大学文学部研究叢書37, 2015年). 引用は『鉄器時代のブリテン』, 67, 110頁. ブリテン考古学界の「ケルト」観の変化については, 南川高志『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』(岩波書店, 2003年), 13-15, 61-87頁も参照のこと.
 - 28) 新納『鉄器時代のブリテン』, 113頁.
 - 29) 田中「「島のケルト」再考」, 73頁.
 - 30) Mallory, J. P., *In Search of the Irish Dreamtime: Archaeology & Early Irish Literature* (London: Thames & Hudson, 2016), pp. 278-279.

(2017.9.29受付)